



JICA

エキスパート

みやざき



第2号
Nov. 1998

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

CONTENTS

JICA派遣専門家の殉職に思う

玉井 理

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報第2号によせて

中垣 長睦

会員の現地報告シリーズ2 ホンジュラス国と水資源
事務報告および情報

秋吉 康弘

会員の動向

会員の近況・メッセージ

JICA派遣専門家の殉職に思う

宮崎県JICA派遣専門家連絡会

会長 玉井 理

7月20日に国連タジキスタン監視団政務官秋野豊氏（前筑波大学助教授）が反政府勢力の銃撃を受けて非業の死を遂げられてから、まだ2カ月も経たない9月17日、タンザニアでJICA派遣専門家、花岡理英子さんが強盗に銃撃されて尊い命を落とされたとの報道を目にし、愕然としました。看護婦であった花岡さんは、海外青年協力隊員としてガーナで活躍された折りに、現地における臨床検査状況の不備を知り、帰国後、さらにこの分野についての専門技術・知識を身につけて、今回、臨床検査専門家としてのタンザニア派遣となり、その活躍が大いに期待されていた矢先でした。まさに、国家的損失であり、真に残念でなりません。ご両親始め、ご家族の皆様のお嘆き、お悲しみの深さは測り知れないものでありましょう。告別式場のロビーに、在りし日の花岡さんが、ご両親に現地での活躍ぶりを報告するべく送られた写真の数々が閲覧に供されていました。現地の人々に溶け込

み、潑刺として活躍しておられる在りし日の花岡さんの姿がそこにありました。見終わって気がつく、それらは、タンザニアの写真ではなく、いずれもガーナのものでした。着任早々で、まだ、ご両親への報告の写真を撮るゆとりもないままに、新任地での仕事に没頭しておられ、この度の事件に遭われたものと推測しました。返す返すも残念でなりません。

9月末現在、7,000人を越えるJICAからの派遣者が、国際貢献の先兵として海外で活躍中です。これらの方々の安全管理が一層強化されるよう心から願っています。今後ますます国民参加型の国際協力の推進に力を入れていこうとしている矢先に起こった今回の事件、国をあげての国際協力の気運にマイナスの影響を与えないように、海外での国際協力活動を目指している方々が安心して活躍できる条件づくりを切に希望するところです。

宮崎県JICA派遣専門家連絡会会報第2号によせて

国際協力事業団九州国際センター
所長 中垣 長睦

今年の3月に当センターに来る前は、3年間JICAのインドネシア事務所で勤務していました。'75年にはJICAに社会人採用で入団し、国内本部は、協力隊事務局、派遣事業部、林業水産開発協力部の3部局に勤務しました。国内の地方勤務は、協力隊の駒ヶ根訓練所に次いで今回が2回目です。一方、JICAでの海外勤務は、最初がアラブ首長国連邦（砂漠農業開発試験場のプロジェクトリーダー兼調整員）次いでフィリピン（協力隊事業の調整員）、その次がザンビア（協力隊事業の駐在員）、そして前述した直近のインドネシア（JICA事務所次長）となります。JICAに入団する前は、協力隊員として3年余フィリピンで活動、帰国後国内協力員第1号、そしてアメリカに1年留学しました。

自分自身の協力隊員、また専門家としての生活、活動を振り返ってみると、いろいろ苦勞したことが結果としてかけがえのない貴重な体験となっていると、というような実感があります。そのような自分の経験はこれまでも雑誌の寄稿や本の出版という形で記し、またテレビへの出演、教育現場での講演（大学、高校等）というような形でフィードバックされてきました。このように私自身はかなり自分の体験を国際協力そのものに対してと、国民の国際協力の理解を深めるためにフィードバックする機会をもってきました。そのような際に常に思うことは、現地での汗と涙の経験や苦勞の記憶が鮮明なうちにその粗筋をメモなどに留めておくことの重要さです。やはり熱い想いのうちと、冷静に分別が加わったのとは少

しニュアンスに違いがでできます。そして、何よりも一般の国民の方には、必ずしも理路整然とした分析よりも、“熱き血潮の感じられる”話の方が訴える力が強いのではないかと思われます。

今や国のレベルのみならず、県市町村の地方自治体、教育・研究機関、各種NGO等が、国際理解・交流・協力について直接または間接にかかわりをもっています。そして、これから国際理解を深めるための“国際理解教育”や、国際交流と、さらに国際協力についても一層促進していこうという機運が地方自治体をはじめ幅広くあると思われます。このような現下の状況をみますと、気運を継続し、事業を実施していくためには、何よりも県民、市民等の理解を深めることが大変重要であると思われます。マスコミも全体として国際理解・交流・協力について注目しており、特にこの面での地域における人々の動向と関心にはこの他注目していますので、帰国専門家連絡会の存在をこれらの関係者に知ってもらうのがまず大切ではないでしょうか。そして、いろいろな関係機関・団体等とのコンタクトをしていくことによって、連携を試みて専門家の皆様の貴重な経験が地元の地域にフィードバックされる機会が増えていくように思われます。このような観点から、今回宮崎県帰国専門家連絡会として第2号の会報を発行されることは、関係者に本会の存在と動きを伝える大変良い機会になると思っています。

ホンデュラス国と水資源

宮崎大学農学部

秋吉 康弘

私は、1996年11月1日から12月1日まで30日間ホンデュラスかんがい排水技術開発プロジェクトの“頭首工の設計”の短期専門家としてホンデュラス国へ参りました。ホンデュラス国は中米の中央部に位置し、カリブ海に面した国で、非常に貧しい国であります。JICAからの要請でホンデュラス国への話があったときは、非常に不安な気がしておりました。成田→ダラス→マイアミを経由して、ホンデュラス国の首都テグシガルパの国際空港に降り立つ際、上空から見える景色は、緑のない、山肌も黄土色の土のみが強調された光景に、この国で、どのようにして水資源開発を行うのか不安は高まるばかりでした。案の定、降り立った空港の出国ゲートを一歩出た瞬間、小さな子供たちに囲まれて荷物の奪い合い。一瞬足は荷物をしっかりと抱き抱え、いま出た出国ゲートへ向かった次第です。しかし、ホンデュラス国での30日間は非常に楽しく、また、素晴らしい日々でありました。ホンデュラス国は、非常に明るく、人間も非常に楽しいラテン系の国であり、一遍に好きになりました。

さて、テグシガルパから80km離れたコマヤグアの町の宿舎である農業開発研修センター(CEDA)も、非常に過ごしやすく、JICAの皆さんに非常に良くしていただき、お世話になり、快適な日々を送れたことを感謝している次第です。

ここでの仕事は、私の研究している水資源開発のための溪流取水工をホンデュラス国に建設するためのマニュアル作りと、この構造物の設計の仕方をカウンターパートへ教えることが目的でありました。

さて、マニュアル作りを行いながら、さらに、現地の実状を見て歩きました。コマヤグアから2時間ぐらい車に揺られた所にロザリオ町があり、さらに、この町から5km離れたところに、電気も、水道も、ガスもないトウモロコシと豆で自活している貧しいラホージャ村があります。ラホージャとは日本語で宝石と言うそうです。ロザリオの宝石村です。素晴らしい名前の村です。ここで、数km離れた溪流に小さな堰を設け、取水して数kmの間を30mmの塩ビ管で導水して、村の一番高い山肌に直径4m程度のタンクを作り、塩素滅菌を行い、27軒の家の前に蛇口を取り付け水道を引いたのです。村人の喜ぶさまはこの写真のとおりです。毎日、数km離れた川まで

女の人が瓶を頭にのせて、来る日も来る日も、風の日も、雨の日も、寒い日も毎日毎日、1日に何度となく山道を往復し、行くときは下り斜面で水瓶も軽いのですが、帰りは水瓶には満杯に水が入り重たく、登りの山道、道も凸凹道。この毎日の仕事がなくなった女性の喜ぶ様子を見てみると、我々も嬉しく、涙が出るほどでありました。ただ、日程の関係で竣工式に出られなかったことが非常に残念でしかたありませんでした。

私の数倍もあろうかと思うような大きな目をしたかわいい子供達が、洋服も着ているのか着ていないのか分からないような状況で、足は裸足がほとんどです。はじめは躊躇して恥ずかしがっているのですが、その内私の回りに集まってきて、わからない言葉で話しかけてくるのです。この時ばかりはスペイン語の話せないわからない自分を恨めしく感じた次第です。その子供達のお腹が大きく膨れているのです。寄生虫がいるのです。ラホージャ村に行くときは、自分たちでお金を出し合って、牛肉とトルティージャ(トウモロコシで作ったホットケーキのようなパン)と虫下しの薬、学用品持って行くのです。洋服も、日本円で1万円も出せば、古着が200着も買えるとのことで、直ぐさまカンパをした次第です。

ヨーロッパなどの先進国に行くよりも、ドイツやスイスの山の美しさ、レマン湖のほとりで夕焼けを見るのも素晴らしい光景ですが、開発途上国に行くと、このような仕事ができることの素晴らしさに、この上もなく喜びを感じ、より一層努力をしなければと自分自身にむち打った次第です。

さて、ホンデュラス国の水資源状況と農業の実体ですが、裕福な企業農家では、農場の中に、二次製品のU字溝の水路が引かれ、点滴かんがいやサイホンなどの水利構造物が見られます。また、アメリカのDOLEのバナナのプランテーションでは、スプリンクラーが元気に回っています。しかし、ほとんどの農家では、山の斜面の痩せた畑で、天水を利用してトウモロコシと豆を栽培している状況です。

また、河川は勾配が小さく蛇行しているために、一旦雨が降ると大洪水を引き起こします。地主は高台に家を構えているので問題はないのですが、一般人の小さな家は、全て水浸しの有様。企業の農場は盛り土をし、高畝

になっているので、雨が降っても農作物が冠水するなどの被害は全くないのですが、一般農家では収穫はできない有様です。

また、山にあった木々は燃料として伐採され、山肌は丸裸です。そのために、雨が降ると家庭のシャワーからは真黄色の水が出、乾くと頭は砂でザラザラです。ホンデュラス国の一般人は、このような水を瓶に溜め、上水を掬って飲料水にしているのです。

ホンデュラス国には、JICAプロジェクトが建設した堰や、頭首工、水路など多くの農業水利構造物が見られますが、問題は、これを維持管理する運営資金がなく、利用がいま一つと言った状況です。また、建設中のダムもあるのですが、資金面でストップしている有様です。しかし、水さえ確保することが出来るならば、この温暖な気候と地の利を利用した農作物の多収穫は可能と考える次第です。すなわち、ホンデュラス国では、維持管理に手間のかからない取水構造物でのかんがい用水の確保が絶対条件であります。我々の開発した溪流取水構造物は、この条件に見合っており、大いに普及させる意義のあることを再確認した次第です。この溪流取水構造物は、条件によっては発電も可能でありますので、あのロザリオの宝石村に今度は電気を引きたいと胸躍らせているのです。ロザリオの宝石村のあの純粋な子供達のためには何でもしてあげたいと考えている次第です。

また、CEDAには、JICAによって建設された水理実験室やコンクリート実験室、土質実験室があり、水理実験室は、建設後数年は経過しているのですが、全くの手つかずの状態です。カウンターパートは、大学を出ているのですが講義のみで水理実験はしたことがないとのこと、ムズムズする私の手は、手製の堰を制作し、カウンターパートに水理の講義をした次第です。

さて、週末は、長期専門家の方々にいろいろな所に連れて行ってもらいました。

カリブ海に浮かぶロアタン島へ！ ここは、リゾート地で、ヘミングウェイの”老人と海”の世界です。海には波はなく、ただ、満ち潮が海辺の珊瑚礁の浜辺を通り過ぎる海の音がするだけです。そして、椰子やバナナ、真っ赤なハイビスカスが咲き乱れ、海辺のベンチには美人コンテストNo.1 (私にはこれ以上に見える)のラテン系の美女が水着姿で本を読みながら日光浴をしています。もう最高です。ホテルの造りも高層建築ではなく、2階建ての、自然の景色と環境を重視した構造になっているのです。ここで、数日間でものんびり出来れば、心身ともにリフレッシュすること請け合いです。なんと日本人の息抜きの手軽なこと、酒を飲んで、カラオケを歌って気晴らしをすることなど、なんとナンセンスなことであるか。ヨーロッパの人々が2~3か月間、地中海でバカンスを楽しむ気持ちが、このような世の中があっ

たのかと初めて知った次第です。また、初めてのカリブ海でのトローリング、カリブ海を満喫した次第です。

また、食べ物の美味しいこと、キングクラブと言う私の手ほどのカニの爪の美味しいこと最高でした(それも、3匹で1,800円です)。また、他の日には、インカ文明の余韻の残る、一山越せば隣国のエルサルバドルと言う国境の町サンタ・ロシータへ行き、インカ人特有の背は低く、顔がまん丸なかわいい子供達と遊ぶことが出来、満足の一時でありました。

全ての町には、必ず町の中央部に公園があり、その側には素晴らしい大きな教会がありました。不思議なことに、日本では祭壇中央部には、キリストの像があるのですが、このホンデュラスでは、祭壇の中央部にはマリア様が存在するのです。まだ、その違いは解明しておりません。

このようなホンデュラスでの30日間でありましたが、溪流取水工の設計マニュアルの下書きも終え、後は大変お世話になり、今回のホンデュラス行きのチャンスを与えていただいた長期専門家の宮下 敦典氏(宮崎県農林水産部)にスペイン語訳を託し今回の仕事を完了したのであります。

JICAの人々、地元の人々に心温まるもてなしを受け、また、開発途上国のいろいろな解決しなければならない問題点を、“地球は一つ”の精神の基に、我々は何をなすべきか、何が出来るかを考えながら、出来ることは何でもしたいと言う気持ちを持ちつつ、また再びこの地へ来る機会があることを念じ、まだ居たい気持ちを押さええながら、帰路に付いた次第です。



初めて見る我が家の水道
蛇口からほとぼしり出る水を喜ぶ村人

事務報告および情報

1. 平成9年度宮崎県JICA派遣専門家連絡会総会

日時：平成10年2月13日（金）18:00～20:30

場所：みやざき会館（宮崎市瀬頭2-1-10）

出席者：来賓4名、会員15名、事務局員2名

内容：

県連絡会会長、国際協力事業団九州国際センター所長の挨拶、来賓として宮崎県国際交流課上原課長の挨拶、その他の来賓の紹介、新規加入会員の紹介の後、以下の議事が行われた。

議事：

1) JICA帰国専門家中央連絡会の報告

2) 本年度の活動報告

(1) 「国際協力写真パネル展」の開催

平成9年11月28日（金）～12月1日（月）

場所：JRミヤザキ駅中央コンコース

(2) 平成9年度全国連絡会会報への投稿

足立幹事が執筆「国内でできる国際協力」

(3) 県連絡会会報の発行

「JICAエキスパートみやざき」創刊号発刊

(4) 関係団体の支援・交流

*「宮崎県青年海外協力隊を支援する会」が発足（97,10,31）、当連絡会会長が理事のメンバーとして参加、協力する事になった。

*「アジア・欧州ヤングリーダーズシンポジウム」に足立幹事が参加

*「平成9年度国際交流団体懇談会」に足立幹事が参加

(5) 会員個人としての活動

* 橋原 健会員 ラジオ出演：「地方における国際協力について」FMみやざき（97,05）、講演：「世界の農業」県立宮崎農業高校（97,07）、「私の見た世界」町立高城中学校（97,12）

* 倍 憲一会員 講演・卓話：「中国事情」等県内国際交流団体等（97,04～98,01,計8回）

* 日高健夫会員 留学生の受け入れ：鹿児島工専在学タイ国留学生を自宅に3泊（97,08）

3) 今後の活動について

活動重点項目をあげ、活動グループをつくることが必要との意見が出された。

4) 役員の変更

現会長および現幹事が留任することとなった。

5) 現地活動報告

議事終了後、秋吉康弘会員による現地活動報告が行われた。テーマは「ホンデユラス国と水資源」で多くの現地のスライドを映写しながらの興味深い現地報告であった。

報告内容の要旨は本号に掲載してある。

6) 意見交換等

ついで、国際交流（協力）関係者との意見交換会が持たれ、宮崎県国際交流課上原課長から宮崎県の国際交流事業について説明を受け、また、宮崎県国際交流協会下西事務局長から（財）宮崎県国際交流協会の事業について説明を受けた後、意見交換を行った。

2. 平成10年度帰国専門家連絡会中央連絡会

日時：平成10年7月24日（金）

場所：JICA国際協力総合研修所

内容：

1) 挨拶（伊集院JICA理事）

ODAを取り巻く環境の変化の中で、国民参加型国際協力を推進するためには、ODAについての国民の十分な理解を得ることが重要である。そのためには、ODA最前線の体験者でありJICA事業の理解者である帰国専門家が「語り部」として積極的に援助の必要性を説く役割に参加、協力することを期待する。地方におけるJICAの存在感を高める意味でも、JICAとして連絡会の活動支援を継続するとともに、各連絡会それぞれの自主性を尊重しつつ、パートナーとして共に共通の目標を目指したい。

2) 「ODAをめぐる新たな動き」について

（外務省経済協力局 目賀田政策課長）

平成10年度のODA当初予算がマイナス10.4%となり、財政改革法によれば11、12年度も前年度以下に抑えられると予想される。また、円安等により、ODA予算に関する厳しい状況は今後も変わらないと思われる。しかし、国際貢献の柱であるODAについては、存在感の維持、質の高い援助を実施していく必要があると認識している。アジア経済危機への支援、協力の必要性はむしろ増加し、アフリカにおける貧困は深刻な状態にある。また、種々の環境問題に対する地球規模での取り組みも重要な課題となっている。旧社会主義経済諸国等の市場経済化、民主化促進、地域紛争防止、復興等、国際的な援助の必要性は高まる傾向にある。このような状況の中で、ODAの在り方の見直し、改革が求められている。活力ある日本社会を国際的に保っていく上で、ODAを通じての国際貢献の姿勢を決して後退させてはならない。ODA事業は21世紀の日本に対する投資でもある。ODA事業の役割について国民の理解を得よう協力願いたい。

3) 「国民参加型事業促進のためのJICAの取り組み」
（小嶋JICA企画部長）

国民参加型事業の必要性については、地方自治体等か

ら国際協力・国際交流継続の希望があること、NGOの役割への評価、援助活動に対する国民の理解を促進し参加の希望に応える、という3つの背景があると認識しており、国民が直接・間接に参加する事業の拡充とともに、その背景となる情報の公開、開示の強化の2面で充実させていきたい。

国民参加型援助の公式な定義はないが、国民に参加の機会が開かれ、国民の理解と支持に基づいた援助を実施していくための様々な取り組みを総称して国民参加型事業とよいかと考える。

JICAとしては次の3つの方向でその促進に努めたい。

1. 各種ボランティア事業及び専門家リクルートの一般からの公募の拡充、2. 地方自治体・NGO・民間セクターとの連携強化、3. 援助関連の情報公開、提供・開示等の強化。

青年海外協力隊・シニアなどボランティア事業、専門家一般公募、専門家登録制度、地方自治体・NGOとの連携等の取り組みをさらに促進する。また、NGOに関しては国内の民間支援基盤の強化が必要と考える。

ODAに対する国民の目が厳しくなる一方、援助活動参加への期待にどこまで応えられるかが今後の課題。来年度予算要求の一環として国民参加型開発パートナー事業（NGO、大学、地方公共団体等に対し一定のプロジェクトを一括委託）を検討中である。

4) 連絡会の活動事例紹介

今年度は3連絡会について活動紹介がなされた。

(1) JICA帰国専門家岩手県連絡会（太田会長）

発足年度：平成4年度、会員数：68名

運営組織：会長1、副会長2、幹事6、監事2名

主な活動：

(a) 県国際交流協会の助成により平成6～7年「国際協力の広場」（帰国専門家の任地写真集、民芸品の展示、任国状況報告、留学生・研修員による自国紹介、交流懇親会）を開催。

(b) 会報「連絡会通信」年2回発行

(c) 国際協力講演会（協力隊OB会、協力隊を育てる会と共催）を開催

(d) 小冊子「海外協力のきずな」を発行。

(2) 奈良県JICA派遣専門家連絡会（京兼代表幹事）

発足年度：平成4年度、会員数：28名

運営組織：代表幹事1、幹事2名

主な活動：

(a) 国際交流関係団体の行事を後援（日本インドネシア友好協会10周年記念－インドネシアの芸術文化を楽しもう－）。

(b) 青年海外協力隊奈良県OB会との共催による「国際協力の広場」（国際協力セミナー、開発教育セミナー、国際協力パネル展、民芸品展示、民族料理紹介、民族音楽紹介等）を開催。

(c) ボランティア活動情報提供システム奈良ボランティアネットに入会

(3) JICA帰国専門家愛媛県連絡会（安部代表幹事）

発足年度：平成3年度、会員数：52名

運営組織：代表幹事1、幹事6名（1名支部長）

主な活動：

(a) 連絡会紹介パンフレット（色刷り）1500部を作成し、関係団体に配布。

(b) 国際交流行事「国際ボランティア貯金シンポジウム」（四国郵政局主催）に参加し、パネルディスカッション「あなたもできる国際協力」のコーディネーターを勤めた。このシンポジウムには、アグネス・チャンの基調講演もあり、盛会であった。

5) 討議

討議議題：

昨年度に引き続き、下記の議題についてさらに討議を深めた。「国民参加型の国際協力を実現・持続するために連絡会は何をすべきか」「JICAと連絡会の連携のあり方」

討議形式：

昨年同様、分科会で討議の後、全体会議で討議した。

国民参加型の国際協力を実現・持続するために、開発途上国で国際協力活動の第一線において専門家として活躍した体験を有する帰国専門家が「語り部」として果たす役割が極めて大きいということをベースに、その具体的取り組みについて、討議がなされた。討議に際しては、先に紹介された3連絡会の活動が参考にされた。

(1) 分科会の討議概要：

3つの分科会から報告された意見の概要は以下のとおりである。

○ 国際協力も中央集権から地方分権型への視点が必要。地方都市は開発途上国の町との姉妹都市関係を結ぶ必要がある。

○ 国別、地域別、分野別に連絡会の会合を持つことも必要。

○ 国際協力に関する県や大学の連携システム、県にある国際協力関係組織との協力体制、国民参加型協力、プロジェクトに対する協力を行うための組織など、一層の組織化が必要。

○ 連絡会へのニーズを的確に捉えるために、地方自治体や交流協会との連携を密にし、また、連絡会についての広報を十分に行う必要がある。

○ 連絡会は協力隊OB会に比べ認知度が低いので、これを高める必要がある。

協力隊OB会は公益的な法人組織を作って活動している。帰国専門家も組織の一層の強化を図り、シンクタンク的に機能するようなものにすべきである。

- 青年海外協力隊OBとの連携を密にすることが必要であるが、その前段階として両者の相互理解を十分にすることが重要。
 - 各連絡会は、それぞれ、環境条件が異なるので、それぞれの状況に即した活動を展開することが必要。
 - この活動は教育活動であるから、早急に成果があるものではなく、時間をかけて一步一步積み上げていくことが必要。
 - JICAの企画事業（ボランティア事業、専門家の一般公募、専門家候補の登録制度等）を足がかりに活動を展開することも必要。
 - 専門家の経験をコミュニティの住民に知らせ、相談にのることが参加の促進につながる。
 - 語り部として取り組むに際し、専門家自身の啓蒙も必要。
 - JICAからの情報を豊富に速やかに入手、活用する（Eメール、ホームページなど）
 - 未入会の帰国専門家に対する連絡会のPRも必要。
 - JICAに対する要望：帰国協力隊員が先進国にも研修に行けるような制度はないか。研修事業ははじめ国内での事業にODA資金をより活用できないか。
- (2) 全体会の討議概要：
- 分科会からの報告を踏まえて「連絡会の組織化」、「協力隊OB会との連携」、「JICAからの情報公開、情報提供」にしばって全体討議がなされた。
- 「連絡会の組織化」
国民参加型事業促進のためには、一層の組織化を進めることが必要であるが、協力隊OB会のような公益的な法人化については、引き続き検討することとなった。
 - 「協力隊OB会との連携」
協力隊OB会との連携の重要性については十分認識されているが、協力関係を構築するには、継続的なアプローチによる十分な相互理解をすることが必要である。JICAとしても対応していきたい（国総研五十嵐所長）。
 - 「JICAからの情報公開、情報提供」
希望する具体的情報例としては、専門家の一般公募、専門家登録、シニア海外ボランティア、日系社会シニアボランティアに関する情報等があげられた。これらについては、国総研五十嵐所長からより一層の説明ならびに情報の提供を進める旨の説明があった。
また、松岡派遣事業部長からは、コミュニケーションを良くする方向で「EXPERT」誌その他JICA情報誌の在り方を検討中である旨の報告がなされた。
最後に、「語り部」として活動を継続していくためにも、JICAからの情報提供は重要であり、電子メール等の活用も有効である。また、さらなる組織

化を図ることを目標に、協力隊はじめJICA関連機関との連携を強め、活動を円滑化していく必要があるとのとりまとめがなされた。

6) 連絡会結成実績

平成9年度以降に岡山、名古屋、山口の3連絡会が結成され、地域帰国専門家連絡会の数は37となった。また、今年度中に長野にも結成の予定である。

7) JICA事務局からの報告

(1) 連絡会のPR

- 現役の専門家に対する連絡会のPRとして、各事業部を通じて連絡会のパンフレットを帰国専門家に配布することにした。
- EXPERT誌、派遣専門家の手引き、インターネットホームページに連絡会の項目を掲載。
- 派遣専門家の手引きには連絡会への参加希望届けを折り込むこととし、希望者が所管のセンター、支部に提出するようにした。

(2) 国民参加型協力に関する調査研究

国総研では国民参加型協力に関する調査研究として地方自治体へのアンケートを実施し、国際協力実施のメリット、地域に還元することの重要性、自治体内のコンセンサスの在り方、国際協力の理念を確立するにあたって地域住民を巻き込むことの重要性等につき検討中。とりまとめ次第、提供する。

8) 中央連絡会での配布資料、刊行物など

ご覧になりたい方は玉井までご連絡下さい。

- 「21世紀に向けてのODA改革懇談会報告書」（平成10年1月）
- 「JICAと地方自治体との連携について」JICA企画部連携協力推進室（平成10年7月）
- 「派遣専門家登録制度のご案内」JICA国際協力総合研修所
- 「JICA帰国専門家宮城県連絡会会報5周年記念特集号（第5号）（1998,3）
- 「海外技術協力NIIGATA No.3」新潟県JICA帰国専門家連絡会（1998,2）
- 「ブーメランいしかわNo.8」石川県JICA派遣専門家OB会（1998,2）
- 「国際協力の最前線－JICA専門家自身が語る－」JICA専門家中国地区連絡会－会報（6）－（1998,2）
- 「EXPERT 香川」第5号」JICA専門家香川連絡会（1998,7）
- 「エキスパート・高知 No.2」JICA専門家高知連絡会（1998,2）
- 「NEWSLETTER No.1」福岡県JICA派遣専門家連絡会 会報第1号（1998,3）

9) 中央連絡会に出席して 会長 玉井 理

今年度の中央連絡会では、議題の討議に先立って、岩手、奈良、愛媛3県の連絡会の活動が事例報告された。それぞれ、会員数は数十人程度の平均的な規模の連絡会であり、会報の発行あるいは連絡会紹介パンフレットの作成・配布、地域の国際協力・交流行事の共催あるいは参加、青年海外協力隊OB会との連携など、それぞれが置かれている環境条件の中で、いろいろと工夫し、国際協力について一般市民への語りかけに努めている様子を知ることが出来た。そして、地道な草の根としてのPR活動が大切であるが、連絡会単独の活動について一般市民の関心を引くことは、なかなか難しいという感想には、「やはり」と思ったし、さらに、新聞、テレビなどマスコミをできるだけ活用することの大切さも良く判った。

今年度の中央連絡会における議題は、昨年度に引き続き「国民参加型の国際協力を実現・持続するために連絡会は何をなすべきか」および「JICAと連絡会の連携の在り方」であった。ODA最前線での活躍経験を有する帰国専門家で構成する連絡会は、国際協力・支援における日本の役割を国民に広く語りかける適役であるとの認識の下に、これらの議題について討議がなされた。討議では、各連絡会のこれまでの活動経験を通して有効と思われる事例の紹介や問題点の提示があった。地域の国際協力関係団体・組織との連携の大切さ、特に、青年海外協力隊OB会との連携の大切なことは常々感じていたことであつたし、「語り部」の仕事は地道な努力を積み上げていくことであるという意見も同感であつた。また、会員の熱意を持続させる努力の大切さ、会員自身の自己啓発の必要性、などは、自分自身を省みて大いに考えさせられた。

各県の連絡会はそれぞれ会員数や構成、地域の環境条件は異なるので、取り組み方が異なるのは当然であるが、一般市民への語りかけを目標に、常にその機会を捉える努力をし、工夫をして機会を作り、語りかけを持続し、積み上げていくことの大切さは、すべての連絡会に共通するものであると思った。

3. 平成10年度国際交流団体懇談会

平成10年7月2日にホテルプラザ宮崎で開催された。(財)宮崎県国際交流協会の平成10年度事業計画について説明がなされた。事業内容としては、1. 交流推進事業 2. 情報提供事業 3. 在住外国人支援事業 4. 国際化推進事業 5. 受託事業 6. 県国際交流センター管理運営の多岐に亘っている。県内の国際交流関係団体からの参加者による意見交換の後、森 康洋氏(宮崎国際ボランティアセンター)による講演「インドに日本語教師として派遣されて・・・」が行われた。

1) 会員の入会:

今年度は11名の方が入会されました。会の活力が飛躍的に増大することが期待されます。新入会員の方々の、氏名、派遣国、指導科目、派遣時期、配属機関又はプロジェクト名は以下のとおりです。

- 秋吉 康弘 ホンデユラス、頭首工設計、96,11~96,11、天然資源省水資源局・灌漑排水技術開発
井戸 克明 ザンビア、自動車保守整備・修理整備士教育、94,06~96,06、保健省中央自動車整備工場
上山 博人 タイ、乾草調整及び農業機械、97,03~97,05、中部酪農開発計画プロジェクト
氏家 良人 インドネシア、救急医療、96,12~96,12、スモト病院
津野 幸人 エジプト、植物生理・園芸96,11~97,02、カイロ大学農学部園芸プロジェクト
七牟礼純一 インドネシア、国家開発企画庁(BAP-PENAS)、97.9.17~97.10.15、東部インドネシア開発政策確立・支援(チーム派遣)
日田 博 中国 飼料作物 97,09~97,10 水稻機械化と肉用牛生産振興
鉾之原節夫 ボリヴィア 繁殖・衛生 97,08~97,10 国立ガブリエル・レネ・モレノ大学 肉用牛改善計画
町浦 政利 ホンデユラス 肥育豚管理 96,10~96,11 天然資源省牧畜総局・養豚開発計画
宮下 敦典 ホンデユラス かんがい排水技術(水利構造物 95,01~97,01 天然資源省水資源局
山下 耕治 フィリピン 畑地かんがい計画 87,10~90,09 畑地かんがい技術開発プロジェクト

2) 会員の転出:

大谷敏明会員が「農林水産省家畜改良センター」(福島県西白河郡西郷村小田倉小田倉原1)に、また、宮津高公会員が農林水産省九州農政局佐賀中部農地防事務所(佐賀市兵庫町大字淵1872)に転勤のため転出されました。

3) 会員の再派遣:

現在次の3名の会員が再度派遣中です。健康でご活躍されることを期待しています。また、氏名、派遣国、指導科目、派遣時期、配属機関又はプロジェクト名は以下のとおりです。

- 古関 次夫 インドネシア
田中 豊三 ボリビア 96,05
小川喜八郎 ケニア 生物資源利用学科教育指導 98,07,25~8,26 ジョモケニアアツタ農工大学

会員の近況・メッセージ

津野 幸人

平成8年3月に、鳥取大学農学部を定年退職いたしました。その年の暮れからエジプトのカイロ大学農学部園芸科で、植物生理学専門家として少しの期間働きました。

JICA派遣専門家としての経験はこれが初めてでしたが、それまでに東南アジア、赤道アフリカなど30カ国余りの発展途上国での農業調査を、いろいろの分野の研究者とチームを組んでやってきました。多くは文部省海外学術調査の補助金で、文字通り清貧のうちに海外調査を送りましたが、一流の学者と毎晩のように学問を語り、かつ日本の前途を話題としたのは、私の人生では幸せの一時であったと思います。

その後は、毎年アメリカ・アーカンソウ州の稲作農家に住み込み働きをしております。9月末の現在、コンバイン収穫と初め乾燥過程を終えて帰国したばかりです。州都リトルロックは北緯35度線上にあり、この周辺では日本の水稻品種コシヒカリが立派に栽培できます。海外の米生産者から見れば、日本の米市場ほど魅力的なものは他にありません。国際競争に耐える稲作の在り方を毎日考えております。

宮津 高公

拝啓、JICA派遣専門家連絡会のメンバーとしてご連絡頂きながら、何もお手伝い出来なくて申し訳ありませんでした。本年4月より農林水産省九州農政局佐賀中部農地防事務所に転動しております。ご期待に添えなく誠に申し訳ありません。

倍 憲一

花岡理英子さんの壮烈な殉職を悼む

本年9月17日夜（日本時間18日未明）、JICA派遣専門家花岡理英子さん（35歳、延岡市土々呂町出身）が、タンザニア国の首都ダルエスサラーム市内で、日本から到着したばかりの花岡さん所有の日本製四輪駆動車強奪目的の犯人に銃弾を浴び、若い命を散らした。現地人4人の犯行であった。

私は、ニュースを聞きながら、とっさに、8年前の1991年7月12日、ペルーにおいて発生した、JICA派遣専門家（農業技術者）3人に対する射殺事件を鮮烈に思い出した。このテロ事件は、ペルー反政府ゲリラが、フジモリ大統領に反抗する目的で、日本・ペルー合同農業研究施設「野菜生産技術センター」において、それも全職員の前で、長期専門家3人を射殺する残忍なものであった。犠牲となった3人の専門家は、その年の2月、東京・市ヶ谷のJICA研修所において、私も一緒に事前研修を受けた、いわゆる「同期の桜」であった。

当時私は、中国江蘇省無錫市の中国公安部交通管理幹

部訓練センターで、NHKの短波放送により事件の発生を知り、大きなショックを受けた。ペルー、タンザニアに比べて、中国ははるかに治安の行き届いた国ではあるが、私のいた訓練センターは、交通、通信上きわめて便の悪い、町はずれの寂しい場所にあった。

私は、県警察本部刑事部参事官、防犯部長及び第一線警察署長のキャリアから、外国ではいつ似たようなテロ、強盗、殺人事件が起きても、決して不思議ではないと判断。有事に備えて、特に、アメリカ人のSELF DEFENCE精神「自分の命は自分で守る」に学び、武器は使用しない無抵抗主義で、自分達の命を守る若干の建設的提案を含めた「危機管理対策案」を作成、JICA中国事務所長に報告した。帰国後当連絡会総会の際、宮崎大学の先生及びJICA本部から、ハード面、ソフト面にわたり、きめ細かな対策の中で、私の提案も採用されていることを聞き安心した。

花岡さんは、以前青年海外協力隊の臨床検査技師としてガーナで活躍した経験もあり、今回はさらに放送大学宮崎学習センターで保険衛生学士を取得しての勤務。その努力心と前向きの姿勢は、JICA本部でも、高く評価されていることを聞知していた。

今日、長期にわたり、女性が途上国で活躍することが、いかに大変であるかは経験した者でなければ、理解できないのではなからうか。花岡さんのような、若いすばらしい女性を失ったことは、日本の大きな不幸であり、損失であり、まことに残念でならない。ご両親始め、ご家族の皆様の悲しみを思うとき、お慰めすることばも見当たらない。

国際協力に携わる私どもは、この事件に挫折することなく、花岡さんの遺志をしっかりと、大きく継承し、若い人を育てていきたいものである。

合掌

日高 健夫

また悲しいニュースが入ってきた。「タンザニアでJICA派遣専門家花岡理英子さん射殺される」とテレビにテロップが流れた。丁度、子供がチャンネルを換えるところだった。家内と私は、「ちょっとまって、元のチャンネルにもどして！」と、テロップは花岡理英子・・・とでている。がく然となる。何と云うことだ・・・、協力隊ガーナOGで5月専門家に採用され、7月初旬彼女の壮行会に参加、現地での活躍と無事の帰国を期待して送ったばかりだった。信じられなかったが、9時のニュースで詳しく報道され、四輪駆動車をねらった3人組に殺害された・・・との事。

誠に残念無念でならない。9月26日午後、花岡さんの遺骨はJICA職員の付き添いのもと、ご両親、弟さんと

共に変わりてはた姿で宮崎空港に帰ってきた。報道関係者の慌ただしい中、ご親せき、友人、協力隊経験者、及び玉井会長他関係者多数で遺影を迎え、JICA公用車にて延岡の自宅へ向かわれるのを見送った。何とも云えないむなしさと共に、この手の犯罪には強い憤りを感じる。

JICA関係の私の海外経験の中で、直接的に親しく交流していた人物や家族の方々の事件事故で、悲しいニュースに接したのはこれで3件目となった。近年JICA関係者が事件事故に遭遇するケースが増えているので関係者のリスクマネジメントや安全管理がみなおされることになる。

このような事件によって、これから海外で活躍をめざしている若い方々に少なからず、影響を与えそうであるが、情熱を持ち続け、途上国での活躍を実現してもらいたいものだ。

七牟礼 純一

多様性の中の統一を掲げる多民族国家インドネシア共和国に関わる機会をJICAからいただき、昨年9月、東部インドネシア地域開発に携わっておられた清水健二専門家を支援する立場で、初めて短期専門家として派遣されました。

一ヶ月の滞在期間でしたが、北スラウェシ州メナド市、西カリマンタン州ポンティアナク市を訪問し、行政・企業関係者のヒアリング、現地視察等を基にそれぞれの市を中心とした開発手法について提言を行いました。

提言の柱とした「日本の地方都市との経済交流」については経済界も行政もきわめて関心が高く、ジャカルタ経由でない独自の活動に意欲的でした。地方の開発は専ら中央主導・依存でしたが、地方都市が自立に目覚めるときこそ新たな展開が期待できるものと思います。そして、JICA活動に日本の地方自治体が関心を持ち参加することが、アジアの発展や平和にますます必要だと感じました。

小川 喜八郎

ケニア・サバンナ農耕文化を訪ねて

この度、私は国際協力事業団(JICA)短期専門家として、1カ月間、ナイロビに滞在し、ジョモケニアック農工大学・食品科学・ポストハーベスト工学科で、当学科の関係教官との食品工学や微生物工学分野の共同研究、さらに食文化にかかわる第一次産業や第二次産業の視察や調査にたずさわることができた。

ケニア共和国は、東部アフリカに位置し、日本からは8,000マイルも離れた赤道直下の遠い国である。しかし、首都ナイロビは、海拔1,800メートルの高地にあり、7月の末というのに、日本の11月の気温(最高20℃)であった。夏と冬のない気候である。

8月初旬にジョモケニアック農工大学も小畦専門家と一緒に、ナイロビを中心とした西北部および北部の主要

第一次産業および第二次産業の実態を調査した。特にナイロビ西北部の製茶工場ならびに製糖およびアルコール工場を見学した。

一方、8月中旬には、ナイロビ北部ケニア山付近の第一次産業の実態調査を行った。輸出の中心である大コーヒー農園、ケニア山西部の大型牧畜ならびにケニア山東部の大森林地帯の農業形態について詳細に把握できた。

本学科はJICA支援のもとで、ケニア食品産業およびポストハーベスト分野の教育・研究および産業技術の先端的役割を果たしている。特に、食品加工や微生物関連の研究では、ケニア産業と密接に関連しており、これらの研究成果は、ケニアの産業教育の発展、食品微生物工学に多大の貢献を行っている。しかし、食品および微生物工学の応用面では、創造的な研究開発と実践の間に多少の問題も残されているようである。

これらの問題解決のためには、本学科教官の一層の研究開発や実践が要求されるが、JICAの新企画や西サハラ諸国への教育・研究および技術支援等の国際協力が最も重要な課題である。

吉山 武敏

JICAの専門家として、タイの研究所へ派遣されたのが、昭和62年(1987)で、2年半の勤務を終わり、平成3年(1991)に飼料作物研究所(栃木県)が設立され、3年半程所長をやっておりましたが、体調をくずし、平成6年(1994)から田舎に引込んでおります。研究所で開発された技術が、中国で増殖中の日本国内育成品種(とうもろこし)のF1雑種判定に利用されており、大変誇りに思っております。何か国際協力活動に役立つことはないだろうかと思いつつ、馬齢を重ねるこの頃です。

永田 雅輝

平成9年度のOB会は所用で欠席しました。OB会が益々盛会になることを祈願します。現在、私の研究室にはJICA研修OBの留学生が2名います。他にも母国あるいは来日等でJICAと関係の深い留学生がいると思われます。

OB会では、これらの留学生を招待して、一緒に懇談できる場をつくり、お互いにJICAの取り組みを理解することは意義あるものと思います。

氏家 良人

北海道は朝夕寒さを感じる季節となってまいりました。宮崎はまだ暑い日が続いているのでしょうか。

実は、私はこの7月1日より、出身地である北海道に戻っております。1996年12月にJICAよりインドネシアに派遣され、救急病院における指導をさせて頂きました。交通ルールが確立されていないような感じもあり、交通事故が非常に多く、忙しい病院で、インドネシアのス

スタッフは頑張っておられました。なつかしい思い出です。

このようなわけで、私は、このまま宮崎県JICA派遣専門家連絡会に入会したままでも宜しいのでしょうか。もし、構わないのであれば、そのようにしたいと思います。

南嶋 洋一

この10年間、ブラジル国2つ、グアテマラ国1つのプロジェクトの専門家そして国内委員会委員、ケニヤ国KEMRIの外部評価委員などとして、ウイルス学・感染症学の領域でJICAの仕事をしてきました。

私の行動目標は、途上国の知識階級の中に親日家を作ることです。いかなるプロジェクトでも、誰のための援助かという現地の問いに答え得るものでなくてはならず、その終了後に何が残ったかによって評価されねばなりません。

わざわざ我々の税金を使って途上国に日本の悪い印象を残す愚かさだけは避けたいと思っています。

秋吉 康弘

私の仕事は、水商売です。水資源を開発するための水利構造物を計画設計する研究を行っている者です。ダムは、大きな河川の中・下流の断面を締め切って取水されるのですが、確かに大量の用水を確保できるのですが、

この反面、大きな人工の構造物は、種々の問題点を醸し出します。そこで、開発したのが、上流の溪流で小さな取水構造物を用いて取水する方法です。1つの溪流からの取水量は少なくとも、数多く集まればダムの貯水量に匹敵するのです。また、位置エネルギーが大きいために水力発電も可能であります。このような取水構造物を計画するために、JICAで中米のホンデュラスへ行き、台湾や、インドネシアでも開発を行っております。また、NGOの関係ですが、ガンジス川の扇状地である、山の全くないバングラデシュでは、雨季には、6,000mm近い雨が降るのですが、乾季には、数mmと全く雨のないところですが、しかし、国益の向上を図るために、乾季に米を作ろうとしています。そのため水源は、地下水に頼っているのです。しかし、地下水は、ヒ素に汚染されWHOの日本の基準値の140倍もの濃度があるのです。そのため、地下水に頼らない新しい水資源を確保するために研究しております。

また、中国では土壌侵食が激しく、河川に土砂が流入します。そのため、河川勾配の小さな長江や黄河では、土砂が河床に堆積し、少雨でも大洪水を発生させ、多くの人々が被害に遭遇しております。このような土壌侵食や、洪水を防止し、また、有効的な水資源を確保するために、頑張っている1人です。

編集後記

昨年の総会前に本連絡会会報の創刊号を刊行したのに続き、会員の皆様のご協力により、第2号をお届けできますことを嬉しく存じます。ただ、会長のご挨拶にもありますように、かつての青年海外協力隊の隊員でもあり、JICAの現役派遣員で本県出身の花岡理英子さんにはタンザニア国の首都ダルエスサーラム市で殉職されましたことをご報告しなければなりません。本来ならご帰国後には私共の会員となつていただく方だけだに残念至極です。心からお悔やみ申し上げ、ご冥福をお祈り致します。玉井会長には延岡の実家までお悔やみに行かれた由に存じます。

次に、37年間の長きにわたって多大なご尽力をいただきました和田弘隆様には、本年3月31日をもって定年退職されました。この場をお借りして会員の皆様とともに感謝いたしたく存じます。もっとも、4月以降は青年海外協力隊協会九州支部の囑託としてご縁は続きますので、引き続き御厚誼願えるものと存じます。いずれにしてもご健勝をお祈りする次第です。

なお、会員の皆様には今後とも本連絡会の活動ならびに会報発展のためにご提案、ご寄稿いただきますよう切望致します。

(幹事記)